

対華二十一条要求と大隈重信

木村時夫

緒言

日本政府が袁世凱の北京政府に対し、悪名高い対華二十一条要求を提出したのは、第一次世界大戦中の一九一五年一月であり、それを最後通牒という、武力を背景とした強硬手段で受諾させたのは同年五月である。

西欧の列強が戦争に忙殺され、アジアの事態を顧りみる余裕のない時期を狙った、日本の中国における権益拡大の態度を、列強が猜疑の眼をもってみたばかりでなく、中国人は痛く憤激し、日本の中国に対する意図に大きな不信任を抱くようになった。そうしてその時生じた日中両国間の深い溝は埋められることもなく、その不幸な関係は第二次大戦後まで継続した。

この日中関係史上の一大汚点と日本の悪政の代表的なものであった対華二十一条要求を提出したのは、その前年四月、新たに政局を担当するにいたった大隈重信内閣である。

大隈重信は早稲田大学の創設者で、その時代を卓越した識見と、彼が抱懷していた開明主義と民主主義的傾向と

は、筆者が現在でも景仰しているところであり、それは単に早稲田大学関係者ばかりでなく、多くの日本国民についても言えることである。しかもその時代の日本政治家の中では、大隈は最もよく中国を理解し、列強の中国侵略を最も憂慮していた一人である。その大隈が首相となった段階で、何故あのような高圧的態度で中国に対し、二十一条要求のような日本人からみても不当苛酷な政策を強行したかは理解に苦しむのである。

本稿は大隈に対するこのような疑惑をいささかでも解明しようとしたものである。

一 大隈の対中国観とその変化

大隈が中国をアジアの大国と見え、日本は常にこれと同盟して、アジアの平和を維持せねばならぬと考えていたことを証明する事実はいくつかある。

その一つは明治一二年（一八七九）、ロシアが中国の伊犁地方に侵入した時、ロシアは思うような成果が得られなかったで、利益の分配を条件として、日本に中国に対する共同行動を申入れた。当時大蔵卿であった大隈は（太政大臣は三条実美）ロシアの要求を拒絶し、「異人種たる露国と提携するのはまちがっている。同文同種骨肉も齊ならぬ関係ある支那を見捨ててはならぬ。唇亡びて齒寒しの譬へのやうに、不合理に支那をいぢめると、アジアは結局四分五裂の端を開き、東洋の平和を破壊するであらう、この場合、日本は安んじたり得るか」と主張して廟議の決定を見た。⁽¹⁾

また明治一六年（一八八三）四月の清仏戦争に際しても、安南を容易に攻略することのできなかったフランスは

日本との提携を申入れてきた。しかし日本政府はこのフランスの要求を拒絶した。当時大隈は下野中で、政府の重要な地位にはいなかったが、その日本政府の措置に賛成し、「これは日本の大切な態度だ、この態度を以て始終支那に臨みたい」といったという。⁽²⁾

要するに大隈は第三国の中国侵略に加担してはならず、中国の独立とその発展を希望していたのである。

また明治一五年（一八八二）と同一七年（一八八四）には、韓国の京城で、壬午、甲申の両変が相ついで勃発した。これら兩事変は日本が朝鮮半島に進出して、中国勢力を駆逐しようとしたために生じたものであったから、日本政府や国民の間には、これを利用して對韓關係を有利に解決しようという強硬論が盛んであったが、大隈はそのような世論に反対し、中韓兩國と協同して東洋の平和を守らねばならぬと主張した。⁽³⁾

また明治二八年（一八九五）三月、それは日清戦争の講和会議の開催中であつたが、大隈は新聞記者に対し「戦勝国の要求とある上は何を欲しても成就しよう。清国は無論遼東半島を割譲するに違ひないが、一旦それを日本に収めたら直ぐに清国に還付するが宜い」と言い、その理由を、「日本天皇陛下は弱小な朝鮮を扶植するために義兵を起されたのである。清国が敗れて、既にその非を悟った上は、清帝は将来我が天皇陛下の親友であらねばならぬ。その親友の発祥地を我が手に収めるのは、わが陛下の御本旨でなからう」と言ったという。⁽⁴⁾

これを要するに、日清戦争後までの大隈は常に中国の独立と強化とを念願し、中国と日本とが同盟することによってアジアの平和を維持しようとしていたことが分る。

しかしこのような大隈の日中同盟論は、三国干渉以後変化した。大隈は露・独・仏三国が日本に干渉して、遼東半島を中国に返還させたことをもって、それは中国が前記三国に依頼して日本に返還させたのであって、「夷を以

て夷を制する」というその伝統的な対外政策が復活したものと考えた。

大隈は明治三十一年（一八九八）六月、初めて内閣を組織してその首相となり、外務大臣を兼任した。この年三月、ドイツは膠州灣を租借し、ロシアは旅順・大連を租借した。ついで六月から七月にかけて、イギリスは九龍半島と威海衛とを租借した。（フランスの広州灣租借は翌三十二年十一月である）

首相兼外相としての大隈はこのような中国の事態を憂慮して決心を新たにした。それは日本が中国に協力して、西欧列強の中国進出を阻止せねばならぬという、中国保全論に変わったことを意味する。

すなわち大隈は明治三十一年、おそらくは九月の頃と思われるが、（戊戌政変により康有為が失脚した直後と思われるので）閣議に対し、その対華政策案を提出している。すなわち

（前略）欧州列国ノ支那土地分有ノ如キ不祥ナルコト固ヨリアルベカラザルハ確信シテ疑ハズト雖、日本モ亦万々一ノ変ニ備フル所ナカルベカラズ。緩急事ニ依リテハ日本モ亦已ムコトヲ得ズ、臨機ノ举措ニ出デザルベカラズ。何トナレバ是レ支那ノ問題ニアラズシテ、実ニ帝国ヲ如何ニシテ防禦シ得ベキヤトノ問題ナルヲ以テナリ。即チ日本帝国ノ正当防禦ノ問題ナレバナリ。（下略）⁽⁵⁾

しかし大隈内閣は成立後僅か六カ月で崩壊したから、大隈も具体的には何ら有効な対中国政策を実行することができなかつた。⁽⁶⁾

しかし大隈のこのような対中国観の変化は日露戦争に対しても継承される。すなわち日露講和の段階で、大隈は

次のように述べている。すなわち

(前略) 列国協同なるものは、國際的の利害、列国間の勢力平衡の上から、時に依っては變化する。夫れ故に一番利害の密接なる關係のものが、世界の利益を代表して余儀なく一國限りの力を以て剣を取らなければならぬといふ事になる。将来に於ても此絶東に於ては、日本が平和を保つの任に当らねばならぬ。世界の平和の保障とならなければならぬといふは、國の地位の上から生ずる天職であつて、実に已むを得ぬことである。夫れ故に講和條件は將來の東洋に於ける災の元を絶つと云ふことが第一の主義でなければならぬ。⁽⁷⁾

大隈はしばしば「支那扶掖は天が日本に与へた使命」だと言つた⁽⁸⁾というが、右の發言も彼の中國に対する使命觀と矛盾するものではあるまい。そして中國に對する領土的野心もなかつたことも信じられよう。しかしロシアの侵略から中國を守るためと稱し、また世界平和の維持に必要な措置とはいいいながら、實際に旧滿州における日本の權益の確保と増大とを、中國が日本の侵略行為と見たことは當然のことであり、大隈の中國觀の變化と密接な關係があるという点で、日清戦争後におけるこの大隈の態度の變化は重要である。

二 大隈の中國革命觀

大隈は明治四四年末から同四五年始めにかけ(一九一〇—一)、折から勃發した中國の辛亥革命に對し、しばし

ばその見解を雑誌上に発表している。それによると、大隈はまず同革命が単なる政權の交替を目的とせず、共和制の施行という政治組織の根本的変革を目指している点、それが従来の中国革命とその性格を異にしていることを指摘し、

過去における支那の革命というものは、ただ主權者を代えるにすぎなかった。それが今度の革命においては、その性質を一変し、ただその主權者を代えるに止まらず、またその國を治める政治的組織をも根本的に改めようとするものである。であるからその性質においては、あたかもかのヨーロッパにおけるレボリユーションと同一で、これまで支那において行われた、いわゆる革命とはその趣がちがう。

と言っている。

また大隈は辛亥革命勃発の原因として、清廷の腐敗墮落、官吏の暴虐、民心の離反等を指摘しているが、そのような内的原因に対し、外部から西欧の高度の文明と新しい政治思想が影響を与えており、しかもその直接影響は日本が与えたものであるとして、

もう一つの原因は何んであるかというと、外部の動揺すなわち、かつてないところのヨーロッパの文明思想が、支那に刺戟を与えた。それが支那人を駆って、國家の政治組織を改造する必要を感じさせたのである。かの自尊心に富む保守的な國民をして、かような改革の必要を感じさせた最初の刺戟は、日本の勃興、すなわち

日清の戦役、日露戦後に現われた日本の勢力であった。それが彼らをして改革の必要を感じしめ、まずいわゆる変法自強というものになって現われた。⁽¹⁰⁾

と述べている。

大隈がこのように辛亥革命を、康有為らによる清廷内部における改革運動の延長線上において捉えていることは、辛亥革命の本質を見過るといふ大きな欠陥を有するものであった。

それはともかく、次に大隈は辛亥革命の将来をどのように予測していたかというところ、清廷は覆滅され、共和制が実施されるであろうと考えていたのであるが、その共和制は中国の歴史と伝統とに鑑み、到底長く維持されないであろうと考えていたようで、次のようにものべている。すなわち

今のところ、まず革命は満朝を顛覆して、共和の思想を實行するところまでは進行すると思う。

しかし支那が将来共和国として存立するかというところ、それは疑問だ。彼らは今日こそ共和と騒いでいるが、一たび権力が人民に帰したとき、決して漠然とした多数の国民が権力を行使することが出来るものではない。

(中略) およそ根本から四千年ほとんど化石的になった支那人の政治思想に、大革新を加えることなく、これまでの経歴のみを基礎としてヨーロッパの政治制度をとるといふことは、結局出来ないと思うのである。しかし彼らは進むべきところまで進まねばやまぬに相違ない。⁽¹¹⁾

このような辛亥革命の将来に対する不信感のためであろうか、大隈は南北の抗争という中国の事態に対しては、中立的な立場を維持し、ただその平和的な解決のみを切望したのである。すなわち

わが輩は、あえて革命党を憎むのでもなければ、また北京政府に同情を表するのでもない。どちらも一つの理窟があるのである。その中にも実に生命を犠牲にして、祖国のために立つというその志を起こした革命党などは、実に愛すべき、あるいは日本人の精神に近いような精神をもっている人々も、よほどいるようである。このような人々には個人として甚だ同情を表するが、東洋平和の大局、支那帝国の将来ということを慮ってみると、よほどそれは考えなくてはならぬように思う。かような觀察から云えば、北軍でもまた南軍でも構わぬ。とにかくこの乱の治まるのを望むこと切なるものがある。東洋の平和の大局から、この戦いほど不幸な戦いはないのである。⁽¹²⁾

といている。一見公平な立場ともいえようが、革命の本質というものに対する考察という点で、大きく欠けるものがあると思われる。しかしまた、このような大隈の中立的立場は、革命派の勝利によってもたらされる、わが国への影響を危惧する山県有朋らの元老からは、この大隈の態度があき足らぬものと考えられ、やがてそれが大隈の後の外交方針を制約することにもなるのである。

中国革命の将来に対する不信感が、大隈をして一見公平な中立的立場をとらしたのであるが、その大隈の態度を一步推し進めると、

このたびの革命乱は果してその目的を達するかどうか。たといその本来の目的が直ちに成就されぬとしても、これによって——この度の革命乱に刺戟されて、満州朝廷が覚醒して積弊事態の政治を改革すれば、それで革命乱の目的がとげられたといつてよい。共和政治の成就是疑わしい。(中略)君主専制に反抗して共和政治となつても、君主専制が一転して少数者の圧制となるに外ならぬ。更にそれが再転すれば君主専制となるに過ぎぬ。⁽¹³⁾

ということになる。

なるほど後半の大隈の見解は、その後の中国における政局の推移を見通したようなところもあり、達見であると思われる。しかし先にも指摘したように、そこには辛亥革命の本質である、民族革命という一面が看過され、その現実的な考慮の故に、中国における歴史的推移の重要な局面を見落すという大きな欠陥を露呈することとなった。

しかしこの段階でも大隈は、折からの中国の禍乱に乗じて日本の權益を拡張するという、当時日本に普遍的であつた風潮に対しては反対で、次のように述べている。

日本人の中には、ドイツやロシアなどとともに、どこか少し領土的侵略でもやろうというような不心得を抱いているものがあるかも知れぬが、それは浅薄な野心である。もし支那がアフリカになったらそれこそ大變で、わが日本のごときは軍備を増さねばならぬ。財政はいよいよ困難に陥る。しかして得るところは何であるかと

いうと、東洋の不安と支那人の怨恨である。(中略)支那を文明に導いて共に富源の開発をはかり、相伴ってアジアの運動を全うすることにしくものはない。これが日本の天職であるとともに、また万年の長計である。⁽¹⁴⁾
そしてその二カ月後には、さらにそれを強調して、

支那と日本とは同種同文の国柄である。しかして支那そのものを回瀾既倒の苦境から救うものは、わが日本である。支那を開発し誘導するものは、わが日本において他にない、支那の復活蘇生の大任に当たるものは、異人種ではいかぬと反覆詳論してある。⁽¹⁵⁾

と述べている。

しかし中国に協力してこれを復活蘇生させるための手段は具体的にどうあるべきか。日本の使命観はそれを具体化する実際の手段と矛盾することになるのである。そしてそれは対華二十一条要求と密接な関連をもつことにもなるのである。

三 大隈内閣の成立事情

大隈内閣が山本権兵衛内閣崩壊の後をうけて成立したのは、大正三年(一九一四)四月で、第一次世界大戦はそ

の三カ月後に勃発している。山本内閣は議会の最大勢力である政友会と成立していたが、シーメンス事件という海軍部内の汚職事件が原因で総辞職したのである。そのために海軍が要求していた軍艦建造のための老大な予算は大幅に削除され、海軍側の大きな不満を惹起した。

さて、当時の日本においては、後継内閣の首班を元老会議が天皇に推薦する仕来りであった。元老というのは明治天皇が維新に功績のあった重臣の中から任命したもので、天皇の最高顧問ともいうべきものを、法制によらず形成していた。当時の元老は山県有朋、大山巖、井上馨、松方正義らで、山県がその筆頭の地位を占めていた。山県はもとから政党嫌い、特に政友会の反政府的態度を憎悪していたので、後継内閣の首班を政党から選ぶとせず、最初貴族院議長の徳川家達を推薦したが、徳川が辞退したので、次に枢密顧問の清浦奎吾を推薦した。清浦は推薦を受けて一旦は組閣に取りかかったが、海軍側が予算案の大幅削減を根にもち、また清浦によるその復活が不可能であると考え、海軍大臣の推薦を拒否した。そのため清浦も組閣することができなくなったので結局辞退した。

このように山本内閣の後継内閣が容易に成立しなかったのは、議会の最大勢力である政友会を向うにまわしては、政党に基礎をもたぬ者が内閣を組織しても、その反対に遭って、到底政局を円滑に運営することの困難なことが予想されたからである。

このような事態に直面して、元老井上馨は当時野にあった大隈重信の起用を決意し、これを山県に進言した。井上は大隈の古くからの友人で、時に政見を異にして断絶の状態もあったが、大隈の政治手腕についてはこれを高く評価していた。しかし山県は以前から深く大隈を憎悪していた。それは大隈が憲法の早期制定を主張していた頃か

らで、その後大隈が政党を組織し、山県らの属する薩長藩閥の専制主義を絶えず非難攻撃していたからである。したがって山県は一度は井上の進言に反対したが、大隈の起用以外にその難局を克服することができなかったので、止むを得ず賛成するにいった。

それは一つには大隈起用の噂が広まると、一般国民の間に大隈内閣の成立を歓迎する機運が高まったからである。当時の大隈は明治三十一年（一八九八）に首相を辞任して以来、政局から離れていたのであるが、国民の間では人気があり、在野の政治家としてその言論を高く評価し、これに傾聴する者も多かったのである。

山県は大隈の首相就任には賛成したが、その暴走を恐れ、腹心の部下である大浦兼武を農商務大臣として同内閣に送り、自分とのパイプ役としたばかりでなく、元老会議の權威をもって、事後しばしば大隈の内治外交方針を制約するにいった。大隈内閣は事実上の山県内閣であったといっても過言ではない。

四 対華政策の原案

大正三年（一九一四）八月八日、ドイツに対する宣戦布告問題を審議するため、元老と閣僚との合同会議が開催されたが、その席上、山県の首唱によって対華政策に対する大要次のような覚書が作製された。これは望月小太郎が審議の結果を執筆したものといわれるが、全文九カ条から成っている。左にその主要部分を列挙する。

一、今回欧州ノ大禍乱ハ日本國運ノ發展ニ対スル大正新代ノ天祐ニシテ、日本國ハ直ニ拳國一致ノ團結ヲ以テ、

此天祐ヲ享受セザルベカラズ

(中略)

一、此戦局ト共ニ英仏露ノ團結・一致ハ更ニ強固ナルト共ニ、日本ハ右三国ト一致團結シテ茲ニ東洋ニ對スル日本ノ利権ヲ確立セザルベカラズ

(中略)

一、此上英仏露ト誠実ナル聯合的團結ヲナシ、此基礎ヲ以テ、日本ハ支那ノ統一者ヲ懷柔セザルベカラズ

(中略)

一、欧州ノ三大外交方面ノ人選ヲ全フスルト共ニ、袁ヲ心服セシムベキ特派員又ハ公使ノ有力ナルモノヲ支那ニ選任セザルベカラズ⁽¹⁶⁾

これによって日本が第一次大戦の勃発をもつて国力発展の好機と考え、積極的に参戦したこと、および對華二十一条要求の基礎が確立されたことがわかる。

山県はその数日後、大隈首相と加藤外相、若槻蔵相の三人にあて長文の書簡を送っているが、その中で、日本の参戦の結果、ドイツの租借地たる膠州湾が日本の手に入ることは勿論であるが、それを中国に還附して、以後ヨーロッパの列強がこれを租借もしくは占領出来ないようにして、中国に恩誼を売り、しかも相当の報酬を得ようとすることは困難だと思われるが、さしあたって

帝國政府にして、已に独逸に通牒を發したる上は、支那に対する今後の方策につきては、固より疾くに確定せる所ある可しと雖とも、愚老の如き未だ詳かに之を聞く能はざるは、竊かに遺憾の至りに堪へず。世間或は帝國の武力を過信し、支那に対しては只威圧を以て志を遂ぐべしとする者あれども、人生の事は一の腕力によりて決定せられ得るか如き簡略のものに非ず。今日の計は先づ日支の關係を改善し、彼をして飽くまで我れに信賴するの念を起さしむるを以て、主眼とせざる可からざるなり。

と述べている。山県のいう对中国關係の改善というのは、辛亥革命勃發以後、日本政府の對華政策が確立せず、一部新聞記者や政論家の意見に左右され、革命勢力に同情して袁世凱を奸物視するかと思えば、革命勢力の北上を阻止して、袁世凱の信を失うなど、結局南北両勢力の不信を買ひ、それが日本に対する輕侮となつてゐるというのである。山県の本心は革命派に対する援助や同情的態度を捨て、袁世凱を援助してこれを懷柔し、滿蒙における權益の確保を計るべきであるといふので、

今や欧州に大亂起り、所謂一等強國は、皆な交戰狀態に在り。何ぞ復た手足を東洋に伸べ、支那に於ける各自の利害を考慮して、隱約の間に競争を爲し、或は威を用ひ或は恩を售るに暇あらんや。袁世凱策略に富むと雖ども、亦恐らく、其の手段に窮せん。是れ寔に帝國が其の對支政策を確立し、從來の怠慢と誤謬とを矯正して、更始一新を策するの好機に非ずや。

と言っている。山県のこのような観点からの袁世凱援助と懷柔とは、具体的にどのようにすべきか。彼はさらに筆を進めて

愚老竊かに以為らく、袁世凱をして我れに對する疑念を一掃せしめ、我れに對して信賴するの意を生ぜしむるには須らく、彼れに向つて人種競争の趨勢を説き、支那民族の歴史と獨立とを保持するには、我れに信賴するを以て最も適當とすることを悟らしめ、而して又他の一方に於て、彼れの為めに有力なる援助を与へ、彼れをして自から安んじて、我れに親近せしむるを要す。……其の有力なる援助とは他なし、財政上の援助是れなり。今回欧州の戦乱により、支那は一時に借款の途を杜絶せられたり、欧州諸國に就て、新たに借款を起すの道なきは勿論、既に協定を経たる借款と雖ども、其未だ受領せざる残額は当分の間之を受領すること能はざるべし。今日支那政府の最も苦痛とする所は、即ち財政の困難にして、而して今や忽ち此の金融の閉塞に會ふ、其の窮窘思ふべきなり。⁽¹⁷⁾

と述べている。

右の書簡は大正三年八月とのみ記してその日付はないが、山県はこの書簡だけでは不安であつたのか、さらに同年九月二十四日、井上邸において、井上、松方、大山の三元老に大隈を混えた會議を開き、「支那ニ對スル根本的大方針」なる覚書を作製した。これも望月の執筆になったという。すなわち

一、(前略)千載一遇ノ時局ハ日本ヲシテ其内外ノ政策上、禍ヲ転ジテ福トナサシムル、一大好機ナルト共ニ弘ク天下ノ人材ヲ網羅シ、真ニ挙国一致ノ実ヲ挙ゲ、以テ国家百年ノ長針ヲ確立センガ為メノ目的ヲ以テ首相及各元老トモ胸襟ヲ開キ、是ヲ是トシ非ヲ非トシ、直言直答、以テ各自ノ意志ヲ疎通シ、茲ニ此国家發展ノ此大目的ヲ達セザルベカラザル事ニ一致シタル事

二、首相ト元老間トニ交換シテ決定シタル外交上一致セル意見ハ、外務大臣タル加藤男之ヲ遵行スル事

三、外交上、大方針ハ首相之ヲ定メ、外相ヲシテ之ヲ遵行セシムル事

四、八月七日以後英国ヨリ東洋ニ於ケル独逸巡洋艦擊沈ノ依頼ヲ受ケタル以来、重大ナル外交上ノ電信往復又ハ交渉文書ハ從來之ヲ元老ニ示サザリシモ、凡テ此等ノ外交文書ハ原文又ハ訳文トナシ、之ヲ元老ニ示シ、尚將來外国ニ關係スル重大ナル交渉事件ニ関シテハ、凡テ事前ニ之ヲ協議シ、以テ挙国一致ノ実ヲ挙グベキ事

五、加藤男ニ対スル幾多ノ批難ノ事實並ニ世論ニ対シ、大隈首相ハ切ニ之ヲ弁護シタルモ、結局加藤男ノ余リ純宮僚式ナルコトハ首相モ之ヲ是認シ、且之迄同男トノ意志ノ疎通ヲ欠キタルコトハ首相ノ不行届ナルコトモ、首相ハ誠意ヲ以テ之ヲ批瀝セラレタレバ、此機会ニ於テ、凡テ過去ノ感情ト行掛トヲ一掃シ、向後此意志ノ疎通ハ国家ノ為メ切ニ之ヲ継続シ、以テ国家ノ和合ト發展トヲ計ラザルベカラズ、而シテ之ガ当面ノ問題トシテ合議セシ具体懸案ヲ記載スレバ左ノ如シ

第一 支那ニ対スル根本的大方針

イ、袁世凱ヲ始メ支那人ヲシテ從來日本ニ対スル不信ト疑惑トヲ一掃シ、以テ我ニ信賴セシムルコトヲ根本的主眼トナス事

口、特殊問題ニ対シ、特使又ハ名ヲ漫遊ニ藉リ、袁ノ信頼スベキ地位並ニ手腕アル人ヲ派遣スル事

ハ、膠州灣ノ返還ニ対スル条件、並ニ交換スベキ利權ノ調査等ノ協議

ニ、鉄道、鉅山其他機會均等主義ニ反セザル政治上經濟上ノ問題ニ関シ、袁ヲシテ契約セシムル事（第二）

第五は略⁽¹⁸⁾

右の覚書に示された對華政策の根本方針が、後の對華二十一条要求の原案となったことはいうまでもないが、その前段に示されている、元老と首相間の了解事項は重要である。

なぜならば日本の参戦問題をめぐって、すでに元老と内閣とくに加藤外相との間に確執のあったこと、およびその事実を踏えて、元老（とくに山県）が大隈内閣の外交方針を制約下に置こうとし、これを首相大隈に了承させたことである。しかし実際には加藤外相が外交の常法を楯に、事後の對華政策について、外交文書を元老に示さず、またその意見を徴することもなかったので、その確執はさらに大なるものとなった。しかも大隈が元老と外相の間に斡旋してその確執を解こうとする積極的な努力をしなかったから、元老の内閣に対する風当りは強められ、外交はむしろ内政の問題となり、それが對華二十一条要求に対する世評を實際以上に悪化させる一因ともなったのである。

さて『公爵山県有朋伝下巻』には、その出典を明記していないが、「当時の秘密文書に換れば、公等が大隈に贈った覚書中、外交問題に関する原案は左の如し⁽¹⁹⁾」として次の文書を挙げている。すなわち

外交上重要事件

(一) 日露同盟の事

将来露国戦捷の後、強大となりし場合には、却て時機を失するを以て、日英同盟以外に露仏を同盟に入るること。

(二) 日仏銀行の交渉を進め、支那に放資すること。

(三) 対支政策の根本義を確定すること。

並に日本に於ける革命党処分方法のこと。

四 膠州灣善後処置のこと。

(五) 滿蒙に於ける洮南府線の不用のこと。

並に露国経営四線の圧迫及び協定のこと。

(六) 独逸山東に於ける三線要求のこと。

(七) 南清に於ける英國の我が利権圧迫。竝に協定のこと。

(八) 米国に於ける独逸の活動。竝に支那に対する米国将来の注意。及び米国が日支問題に干渉せずと云ふことを輕信せざることの注意のこと。

(九) 外務省と參謀本部との調査上、意志疎通を欠くの事情を矯正すること。

右の文書は對華二十一条要求が、当時の中国をめぐる國際關係を元老がいかに見、そして中国に何を求めようと

して出されたかを知るに足る重要なものであるが、とくに第九項において參謀本部と外務省との意志の疎通を強調していることは注目されねばならぬ。すなわち當時の對中國政策が國防上の觀點を中心とし、それによって各種要求が對華二十一条要求の中に盛込まれたことは明らかである。

そのことは加藤外相が後の回顧の中で、

自分が要求の眼目としたのは、第二号、就中、旅順、大連の租借期限延長と、同じく滿鉄及び安奉線の期限延長とであった。それから、滿蒙の鐵道、鉅山に関する利權問題に就いても、後日紛擾の種子となるやうなものを全部解決する積りであった。而して之だけなら、交渉開始後、二三回の談判で支那は大体承諾して居たのである……⁽²⁰⁾

といい、「自己の意に反した要求を、他から強ひられて提出したのではないか」との問いに対しては「自分の意に満たぬものを、種々の事情から盛り込んだ」と答え、その間の事情を

いざ要求を提起すると決まったら、各方面から、これも要求しろ、いや之も解決して貰ひ度い、と山のやうな注文が舞ひ込む始末で、これを篩ひ落すのに一方ならぬ骨を折った。いづれも夫れ相應の理窟があつて、断はるのに苦心をした。無論、所謂有力な筋の要求もあつた。陸軍方面の注文も随分あつた。実業の方面からも、水田を作るなどを初めとして、種々の主張が持ち込まれた。⁽²¹⁾

と言っているのでも、それを裏づけることができる。

以上で大隈が何故その首相在任中に、対華二十一条要求を提出したかという疑問をほぼ解明したことになるが、それを要約すれば次の通りである。

第一に大隈の中国観は徐々に変化し、要求提出の段階では、中国は日本の指導と協力なしには独立できないと考えていたのである。そしてそのためにアジアないし世界の平和が乱れると危惧し、中国革命の勃発による、中国の南北分裂の状態がいよいよその感を深からしめたのである。

第二には大隈が首相に就任したのは元老井上の推挽によるもので、これを受諾したことは同じ元老の山県と妥協したことで、事後大隈はその内治外交において山県の方針を受入れ、それを拒絶することができなかった事情があり、それは加藤外相についても言えることであつた。

第三には大隈の首相就任は元老の推挽とそれとの妥協によつたものではあるが、同時に多数国民の希望によるものでもあつた。しかし当時の日本国民の大多数は中国における權益の拡大を要望し、同要求の達成のためには強硬手段をとることを希望していた。大隈は大衆政治家という名声と自負とのために、あえてその国民的要望を退けることができなかったのである。

元来大隈は綿密細心というよりも豪放粗雑ともいふべき性格の人であつた。当時の大隈は要求の貫徹により、日頃からの持論であつた中国の保全を実現できると樂觀し、過信し、誤信してゐたと思われる。苦境にある一民族の心情を理解することのできなかつた人とも思われる。

このことは、かつて大隈が信頼して、袁世凱に推挙し、その顧問に就任した有賀長雄博士が、交渉開始後は大隈と反対の立場に変わり、日本の国論の是正に努力したということをもつて知ることができる。

五 その後の大隈

大隈は最後通牒による要求達成の後、親交のあったアメリカのハーバート大学総長エリオットは、帰国する姉崎正治に托して、「今回の対中国政策は兄の日頃の主張に反し、高圧的かつ侵略的なものである」と大隈を非難した。それに対して大隈は

支那に対する日本の政策は、支那の瓦解、分割を防ぐに帰着することは、私が度々いった通りである。私の対支政策はそれから離れたことはない。支那の保全は、極東平和の管論であつて、その瓦解は、日本の安全に対する直接の危害である。然しこの目的を達するための方法、道程は、抽象論から割り出すべきでない。第一に支那の現状を深く参酌せねばならぬ。支那は自家の力で独立し得ぬために、所謂「夷を以て夷を制する」といふ病的伝統の外交政策を行つてゐる。曩に支那は日本に向つて、ロシア、フランス、ドイツの干渉を依頼して、自ら分割の端を開いた。（中略）

結局問題の主眼は、支那の瓦解を防ぐ力と権利を有する国は何処だといふことに帰着する。支那には勿論、そうした力がない。外国では差当り、日本のみがその力を有する。けれどもそうかといふて、日本は支那を独

占しようとするのではない。日本は日本と同じように支那に直接の利害を感じる国と協調して、その目的を達成したい。この点に於て、日本の同盟国たるイギリスは、東洋に於ける日本の特殊な位置を認めてゐる。日本は支那に対して、助言者又は監督者たるべき位置に立つてゐる次第だ。⁽²⁾

と弁明してその理解を得たという。

また大隈は第一次世界大戦の終結後、世界の将来に対する展望をしばしば雑誌上に発表しているが、その中で軍備縮小や関税障壁の撤廢の必要など、世界平和のための諸施策については述べている。しかし日中兩國の關係の将来についてふれたことはない。少なくとも兩國の關係の惡化を危惧したことはない。思うに大隈はその理想としていた日中の友好關係が、彼の施策の結果として繼續するであろうと夢想していたのではなからうか。

結 語

すでに過去となつた歴史上の事件や人物を、現在の時点に立つて振返ってみれば、種々な非難も批判も可能である。しかし歴史研究にとって最も重要なことは、先ず第一に歴史上の事件や人物を、その事件が発生し、またその人物が生きていた時代に還元し、過去の時代環境の中で考察してみることである。そして客觀的歴史事實として再現された事件や人物のもつ歴史的意義を考え、今後の我々の生き方との関連において、それらを批判することは歴史研究の第二の重要な作業である。

私は出来るだけ正確な史料に基いて大隈重信と対華二十一条要求との関係を明らかにしたつもりである。そしてこの再現された過去の歴史事実に強い批判と反省とを抱いていることはいうまでもない。

しかし人間個人の道徳と、国家利益を大義名分として追求する国家相互間の道徳とは甚しく異なり、道徳の次元を異にするのではないかとさえ思われる。しかし国家利益の追求はしばしば国民個々の道徳や心情を蹂躪して遂行される。外交史を研究していると特にその感が深い。

日本の対華二十一条要求も決して国民の総意によって行われたものではない。当時においてもそれを非難し批判した者はいたのである。私はその中の一人として、早稲田大学が生んだ石橋湛山の名を挙げ、他日そのことに触れてみたいと記してこの稿の結びとしたい。

注

- (1) 青柳篤恒「大隈の対支外交」(渡辺幾治郎「大隈重信と対華外交」Ⅱ『大隈研究』第二輯一二二～三頁から引用)
- (2) 『大隈侯八十五年史』第三卷三〇四～六〇頁
- (3) 渡辺幾治郎「大隈重信と対華外交」『大隈研究』第二輯一二三頁
- (4) 『大隈侯八十五年史』第二卷二〇三頁
- (5) 渡辺幾治郎は前掲論文の中で、この大隈の対華政策は「大隈文書」中にあると言っているが、早稲田大学社会科学研究所発行の『大隈文書』全五巻中には収録されていない。もっとも同文書は明治十一年代までのものを収めているので、この部分は現在刊行されていないと思われる。
- (6) もっとも大隈内閣の前内閣、第三次伊藤内閣は外務大臣西徳二郎をして、明治三十一年四月二二日付けで、中国に対し、福建省内各地を他国に譲与もしくは貸与しないよう要求し、中国もこれに対し、同月二四日、公文をもって、そのことを保証している。(外務省編『日本外交年表並主要文書上』の一八五～六頁参照)
- (7) 『大隈伯演説集』所収「東亜の平和を論ず」一〇二頁

- (8) 『大隈侯八十五年史』第三卷八九頁
- (9) 明治四十四年十二月一日『新日本』(大隈重信叢書第四卷『薩長劇から國民劇へ』所収「清國革命論(二)」の二二九頁)
- (10) 同右二四八頁
- (11) 同右二五二頁
- (12) 明治四十四年一月一日『新日本』(同右二三三頁)
- (13) 明治四十四年一月一日(同右二六二頁)
- (14) 注(12)に同じ。(二二七)八頁
- (15) 注(13)に同じ。(二六四頁)
- (16) 『大隈侯八十五年史』第二卷一五二頁
- (17) 徳富猪一郎『公爵山県有朋伝』下卷九二〇頁
- (18) 井上侯伝記編纂会編『世外井上侯伝』第五卷三八七頁
- (19) 注(17)に同じ。同書九一六頁
- (20) 加藤伯伝記編纂会編『加藤高明』下卷二〇五頁
- (21) 同右
- (22) 『大隈侯八十五年史』第三卷三〇〇頁

補記

本稿は筆者が昭和五十七年九月一日から同一五日まで、日中関係史訪中団の一員として訪中した際、北京大学および天津の南開大学において、中国の日本史研究者を対象に講演した時の草稿に加筆し、注を施したものである。

教科書問題が喧しく論ぜられていた時であったから、筆者のこのような発表に対し、種々な批判のあったこというまでもないが、それらのやりとりについては別に記したい。